

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.17〉

〈常盤② 課題とキーマン〉

常盤地区には31区があるが、子ども会を組織している区は少ない。共働き世帯が増えたことで役員の成り手がなく、2015年3月には常盤校区子ども会育成連絡協議会を解散した。そうした中、児童の心身の成長や発達に大切な活動が続いているのが、地域おこし団体の「わくわく常盤」（藤永徹也会長）だ。子どもたちが安心して活動できる場を目指し、季節ごとに幅広い行事を開催している。

体験型イベントで自主性伸ばす

地域おこしの「わくわく常盤」

00年7月に、子ども会OBを中心とした13人で結成。きっかけは199

8年ごろ、藤永会長が全国の子ども会関係者が集う研修に参加した際、参

加者の一人に「いずれ子ども会は無くなってしまう。代わりとなる機能を



江戸時代の炭鉱体験をする子どもたち（2018年5月20日撮影）

用意しておいた方がいい」と声を掛けられたことだった。

近所の炭坑跡を探検して回る少年時代を思いだし、宇部炭田発祥の地でもある常盤の歴史を子どもたちに知ってもらおう機会を多くつくりたいと、団体の立ち上げを決意した。

当初は歴史講座を企画していたが、思ったような手応えを感じなかった。実際に見て体験することが大切だろうと、常盤湖周辺に残る山炭生（やまたぶ）、同湖本土手、亀浦古墳の清掃活動を始めることに。すると反響が良くなり、湖を一周する「あるウオーク」を実施した時には、同伴した保護者も山炭生の歴史に関

心を持つようになった。

多くの体験をさせてあげたいと始めた工作や英語、料理の教室、通学合宿なども好評で、保護者から「率先して手伝いをするようになった」と声を掛けられるなど、自主性を伸ばすきっかけづくりにもなっている。

「子どもが集まる機会を失わなくて良かった。今後も生き生きと活動できる場をつくっていく方法を、地区全体で考えていきたい」と藤永会長。現在、会員10人のうち8人が働き世代で、年間を通して行事に携わることが難しい。行事ごとに責任者を分ける分業制にすることで、世代交代後の運営をしやすくしたいと展望を語る。